

汐見四季の存在を私が許容するのは、彼女が私の書くものに一切の興味を示さないからだ。

「私が言うのもおかしいけれど、貴女は怒らないのね」

四季が私にそう訊ねたのは、十三枚目の原稿用紙を折り終わった後のことだった。西麻布中学校の屋上、七月の直射日光が降り注ぐ屋上には、十二羽の折り鶴が散らばっている。四季は手にした十三羽目の折り鶴をそっと投げた。本物の鶴のように優雅に飛んだりはしない。屋上の柵を越えることさえできない。ピアニストめいた四季の細い手を離れた折り鶴は、少しだけ飛んで、すぐに熱された屋上に着地した。

どこにも行けない。

屋上から飛び降りることさえできない。

私は折り鶴の行方ではなく、隣に座る四季をじつと見た。立ち入りを禁止された屋上の、貯水塔の影で、彼女はどこか眠そうな顔をしてえる。だらりと伸ばした手も足も、私よりずっと長い。座っていてもそう感じるくらいなので、立つと私よりずっと背が高くて羨ましくなる。少なくとも彼女は、『前に倣え』で一番前のポーズをとる私の気持ちはわからないだろう。

肩口で切りそろえた茶髪と合わせて、格好いい、という印象が湧くけれど、暑さにだらしなく舌を出しているのを見ると間の抜けた犬のようでもある。どこかアンバランスさが漂う女の子。それが私から見た四季だった。

彼女から見た私は、一体どんな風に見えるのか、少しだけ気になった。

私は言う。

「怒りたいの？　そういう趣味なの？　伽子、あんたを怒った方がいい？」

許可もとらずに人の原稿用紙を延々と折っておいて何を言っているのだろう。しかも今日に始まったことではなく、屋上であうたび毎回同じことをしている。最初の一回目だって、特に許可をとることなく人の原稿を折り鶴にしたくせに、何もかもが今更すぎる。

四季はしゅんと背を丸めて、

「怒られるのは苦手だわ……怒鳴る人も苦手。よくあれだけ活力があると感心するくらい」

「サボリ魔のくせに」

「それはお互い様でしょう、サボリ魔の遠野伽子」
違わない、と私は納得する。午後の授業が始まったばかりのこの時間に屋上にいるということは、即ちサボリ魔だということになる。人のことは一切言えない。ただし私は気が向かないときだけサボるタイプの人間であるのに対して、四季はサボリの常習犯なので一緒にされたくはない。
誤解はされたくないのだけれど。

四季は私の友達でもないし、同類でもないのだから。

「四季は一度こっぴどく叱られるべき」

「それが嫌だから屋上に逃げてるのよ。次の紙、ないの？」

「まだ書けてないよ。伽子はそんなに手が早くないの」

真っ白い四百字詰め原稿用紙をひらひらと見せると、四季はわざとらしく肩をすくめた。こういうわざとらしい動作が悔しいくらいに似合っている。私はそういうのが向いていないので、ときどき羨ましくなってしまう。向いていることなんて、一つとしてない。

小説を書くことだって、向いてなんていない。それくらいしか、できることがないだけだ。

私は鉛筆を握り、十四枚目の原稿用紙に向かい合う。屋上の日陰で体操座りをして、膝にバインダーをあてるようにして原稿用紙に鉛筆を走らせる理由は簡単で、つまるところ書けば書くほど鉛筆がすり減る感覚が好きだからだ。絵が得意ならきつと絵を書いていたし、頭がよければ論文を書いていたかもしれないし、計算が好きなら数字を書いていたかもしれない。でも私は言葉を選んだ。それは言葉が好きだったからでも頭が良かったからでも小説が得意だったからでもなく、それだけは始めから私の世界にあったからだ。言葉を喋ることくらいはできるし、文字を書くことくらいはできるし、小説のようなものを書くことくらいはできる。特に、書き上げたそれを誰に見せるわけでもないのなら。

四季は私にとって、理想的な読者と言えた。

彼女は私の小説を決して読まないのだから。

「十分に早いと思うわよ。小論文のテスト、書き終わるの教室で一番じゃない。私は言葉が苦手だから、そういうの尊敬するわ」

褒められて悪い気分はしないけれど、良い気分も特にならない。そもそも褒められたかどうかさえ定かではない。四季の言葉に対して、裏表を考えることほど無駄なことはない気がする。

四季の言葉はいい加減だから。

彼女は、言葉というものをあまり信じていない。

だから、私の書いた文章を読もうともしないのだ。

それでも私は、言葉について考えてしまう。苦手。嫌いではなく、苦手なのだ。四季は言う。何がどう苦手なのか問い詰めたくなる。私は言葉が得意というわけではないけれど、好きか嫌いかで語るのなら好きだと言いたい程度には思い入れがある。

言葉にすること。

文字にすること。

形にすること。

それが私にとっては世界と関わる数少ない手段だからだ。もっともそんなことをいちいち説明する気もない。私はそのことを追及せず、話を別の方向へと受け流す。

「滅多に教室に来ないのによく知ってるね」

「テストくらいは参加しないと、退学になるもの」

そう言っ、彼女は自然な動作で制服のポケットから煙草を取り出し銜えた。ライターではなくマッチを取り出すのは、ただの格好つけだと思ふ。格好つけるために煙草を吸っている節がある、と私は睨んでいる。四季の行動は基本的にアウトロー寄りで、義務教育を退学になることなんて聞いたこともないけれど、素行の全てがバレたらそれくらいはあり得るかもしれない。少なくとも、半年後に迫った高校受験には多大な影響が出るだろう。